

西俊輔の「毎日楽しく」

Vo1.62 2010年10月号

4、5年ぐらい前の本で、ユニクロの柳井正さんが書かれた「一勝九敗」という本があります。かなりの勝率で会社経営をされているように見える柳井さんですが、経営は試行錯誤の連続で商売には失敗がつきもの、10回新しいことを始めれば9回は失敗すると言っています。柳井さんは一勝九敗ですが、成功した経営者の中には一勝九十九敗（成功するのは100回に1回）と言う経営者もいるそうです。そんな柳井さんは、失敗を教訓にすることの重要性について次のように言います。

「失敗は誰にとっても嫌なものだ。目の前につきつけられる結果から目を逸らし、あるいは蓋をして葬り去りたい気持ちにもなるだろう。しかし、蓋をしたら最後、必ず同じ種類の失敗を繰り返すことになる。失敗は単なる傷ではない。失敗には次につながる成功の芽が潜んでいるものだ。したがって、実行しながら考えて、修正していけばよい。危機につながるような致命的な失敗は絶対にしてはならないが、実行して失敗するのは、実行もせず、分析ばかりしてグズグズしているよりよほどよい。失敗の経験は身につく学習効果として財産になる。」

これとは逆に、成功の中に潜む失敗の芽ということについてもふれています。同社はフリースの大成功によって一気に知名度を上げましたが、それによって社内にマンネリと保守化、形式化、慢心が生まれたと言い、商売は成功したと思った時点でダメになると思う、とも言っています。これについてはこの「毎日楽しく」で何度か書いているセブンアンドアイの鈴木敏文さんも、過去の成功体験を捨てろ、ということをよく言っています。

失敗にめげることなくその原因を分析して次に生かし、成功してもそれにかかれることなく努力をつづける、というのは何も会社経営に限った話ではありません。私たちが日常生活する上でも十分参考になる考え方だと思いますが、実行するのはなかなか難しそうです。

私も頭ではわかっているんですが、実際に失敗するとたいした分析もしないまま忘れてしまおうとしますし、うまくいくといい気になってしまいます。頭でわかっているということと、実行するということの違いは大きいですね。

